
俺の魔法使いな日々

らいふーどす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の魔法使いな日々

【Nコード】

N2394E

【作者名】

らいふーどす

【あらすじ】

魔乃裕介の通う高校は普通とは違う。何処が違うかというところ魔法を学ぶのだ。そんな学校で過ごす彼と愉快な仲間の生活をお楽しみください。やっぱり基本的に不定期更新にしますw

プロローグ

ジリリリリー ジリリリリー・・・
ジリリリ・・・ガチャッ

・・・朝か。

俺はベッドから起き時計を見た。

- 05時20分 -

何故こんな時間に起きたのかは完全に謎だ。まあ、確か今日の入学式は8時40分からだったはず。まだまだ入学式が始まるまで時間があるな。

もう一眠りするのでしょうか・・・

今思えば、この時ちゃんと起きていればあんなことにならなかったのじゃ。

第1話・朝という名の地獄（前書き）

ちよつと話が繋がらなかったなので大幅に改定しました^^；

第1話：朝という名の地獄

・・・う~~~~ん

さて、と。

「2度寝のおかげでとても清しい朝だ。」

そんなことを口にしながらいそいそと着替え始める。

そういえば紹介が遅れたな。

俺の名前は魔乃裕介。今年から高校1年生だ。

背は175cmくらい。体重はヒ・ミ・ツ

・・・悪い。冗談だ。

体重はたぶん60〜65キロくらい・・・だと思っ

何故か？それはここ1年くらい体重を計ってないからさ

それはそうと、俺が今年から通う高校は<神魔高等学校>という学校だ。

この高校は名前もおかしいが、1番変なところがある。

それは魔法を学ぶ、ということだ。

大体の人間は一生魔法など使えずに終わるが、ほとんどの人間には、<魔力>と呼ばれるものを持っていて、その魔力を扱うことにより魔法が使える。

まあ、魔法は基本的に中学校まででは学ばず、高校に入って初めて学ぶ。それも魔法学校じゃないと学ばないがな（笑）

俺の両親はかなり最強の魔法使いだったので、俺は物心つく前から魔法の練習台・・・否、魔法の修練を行ってきた。だから自分で言うのもなんだがかなり魔法は使える。

- 8時35分 -

くそ・・・こんなん絶対に無・・・??

いや、この状態を脱出する方法がひとつだけある。

そう。俺はさつきも言ったとおり魔法が使える。

だから瞬間移動テレポートくらいは朝飯前なんだよねっ！（爆）

・・・もっとはやく気づけ、俺

「行くぜ！魔力集中！瞬間移動テレポート！」

そして俺はその場から消えた。

俺が消える瞬間を見ていた老人は啞然として見ていた。

「なにあいつ？キモッ！」

てめえもかよ。

ヒュン・・・スタッ

「フ・・・我ながら惚れ惚れする着地。」

つと、そんな馬鹿なこと言ってる暇はねえな。

「さて、入学式は体育館であるんだっけ？」

そんなこともうる覚えな俺は負け組み？

「ってうおおおおおおおおおおおおい！！！！」

何故俺がそんなことを叫んだかつて？

『お前の頭が逝ってるからだろう。』

「ちげえよ！つかアンタ誰だよ！？」

やばい。いきなり幻聴が聞こえた。

『ワシは作者じゃ。』

「作者出てくんない！帰れ！」

『酷っ！もういいさ！帰るもん！』

ヒュウウウウウ・・・

・・・さて、話を戻そう。

何故俺がいきなり叫んだか？それは体育館の扉が閉まっているからさ！

「どうしろってんだ・・・。俺の遅刻フラグだったか・・・？」

いや、この状態を脱（以下略

「そうさ！俺は魔法使い！瞬間移動！・・・いつてえ！！！」

「黙れ不良生徒A」

なんてこった・・・初日から1時間遅れの登校・・・

「とりあえず早く教室へ行くことをお勧めしますよ?」

「・・・そーですね。俺の教室って何処でしょう?」

「校舎1階の1-Aのはずです。」

「ありがとうございます。」

一応、最後まで礼儀良く頭を下げておいた。

「それでは。失礼します。」

・・・この人あんま悪い人じゃないかもな。

「よしっ! とりあえずさっさと教室行くか!」

そして俺は校舎へと向かって走って行った。

第2話：謎の教師（？）（現る！（後書き））

とりあえず人物紹介でも少しやっていきますかあ

- 魔乃裕介 -

15歳

髪は茶髪だが地毛　ボサボサして適当にまとめてある
目は普通に黒

とある理由でこの学校に入学するが、魔法は元々トップクラスの實力を持つ。中学時代は見た目から「怖くて近寄りにくい」などと言われてあまり友達もいなかったが、実際は明るい性格

第3話：担任の先生は戦闘狂ですか？

「ふう……」

一応1-A教室の前には着いた。

「さて、どうしますか……」

そう。今俺が教室の前に立っているのには理由がある。
それは……

.....

「はあはあはあ……」

よし。やっと教室が見えてきた……

「……ん？」

俺の視線の先には今まさに教室に入ろうとしている生徒の姿が。

「よかった。遅刻おれだけじゃないみたいだぜ。」

とりあえず少し歩くか。

「皆おっはよおおおおお（笑）」

……俺が言ったわけじゃないからな？今教室に入っていった奴が
言ったんだぞ？

- 1、正々堂々扉から入る。そして死ぬ。
- 2、瞬間移動テレポートを使用する。そして消滅する。
- 3、教室に入った瞬間先生に攻撃魔法を使う。そして返り討ちにあう。
- 4、逃げる。そして殺される。

「・・・全部俺死んでね？」

つか4番とか命令形かよ。

「しょうがねえ・・・後半部分を省略した1番にするか。」

まあ遅刻した俺が悪いしな。

ガラッ

「お・・・おはようございます・・・」

・・・シーン

「え・・・えと、遅刻してすみません。」

「おい。」

「ひゃい!?!」

「何をしてる。早く席に着け。」

「は・・・はい!」

・・・なんだ。別に大丈夫じゃん。

「とか言うと思ったか？」

第3話・担任の先生は戦闘狂ですか？（後書き）

やっともな魔法を出せました^^;

次でやっとも主人公以外のキャラ&名前が登場します。

次回楽しみにしてくださいw

第4話：普通じゃない自己紹介！？

「はあああ〜」

こ・・・怖かった。

今あの先生絶対俺を殺ろうとしてたよ・・・
だってあの目は狩人ハンターの目だったもん。
まあ助かったから良かったけどね！

「なーなーあんた。」

「ん？」

いきなり前の席の男子が声をかけてきた。

「あんたあの先生の魔法防ぐとかかなりやるやん？今日の遅刻人数あんた合わせて4人だったけどあんた以外皆吹っ飛んでたで？」

・・・関西弁とか久しぶりに聞いたな。

「まあ、俺は昔から魔法少しやってたからな。」

「へえ〜。あ、そや。ワイの名前は夏川なつがわしやう翔や。翔って呼んでくれなはれ。」

「俺の名前は魔乃裕介だ。別に呼び方はなんでもいい。」

「ぶつ。魔乃とか変わった名前やな〜。『まーくん』でええか？」

「臨死体験してみるか？」

「すまん。流石に冗談やって。だからそんな目でみんないってくれなはれ・・・」

「もう俺のことは普通に裕介とでも呼んでくれ。」

「了解や〜。」

「おい！てめえら！まだ授業中だ！喋ってんじゃねえ！」

未だに名前の知らない先生が叫ぶ。さっき殺されかけた俺としては本当に怖い。

「で、だ！今からためえらは勝手に自己紹介でもしやがれ！」

勝手に……ってそれ駄目じゃないですか？

「なお！つもらねえ自己紹介したやつはぶっ飛ばす！」

そんなことしたらあなたの首がぶっ飛びますよ？

「俺の首は飛ばねえ」

この高校の教師は皆読心術使えるんですか？

「魔法だ」

そーですか。

生徒Aの場合

「僕の名前は です。皆さんよろしくお願いします。」

「なんだその自己紹介は！？貴様はサルか！！そんな自己紹介をした罰だ！『バーンアウトォ！』」

ドーン

生徒A、保健室へ運ばれる。

生徒Bの場合

「俺は さ！欲しいものは世界！世界征服のために魔法使えるよ
うになるぜ！」

「世界征服は俺がするんだよ！罰ゲーム！『バーンアウトオ！』」

バーン

生徒B、保健室へ運（以下略

「駄目じゃん・・・次俺の番だし・・・今度こそ俺終わったかなあ
・・・」

今のところ自己紹介も5分の4くらいが終わって生き残ったのはそ
の中でも10分の1程度だ

まあそんなで自己紹介も終わりー応クラスの皆の名前も憶えることができた。

あ、ちなみに翔は、

「ワイの名前は夏川翔や！魔法は専ら土系が得意やで！皆さんよろしく頼むわ！」

「ワハハハ！！い、今時の高校生が関西弁！ありえねえ！爆笑！！！！！！い、いいぞ？席着いて（爆）」

って感じで生き残っていた。

関西弁の何が可笑しいんだろう？

翔は翔で

「関西弁の何が悪いんや！全世界の関西弁使ってる人に謝らんかい！」

とか俺に向かって言っていた。

全世界っていつても関西弁を使う人間は日本の限られた人間だけだぞ？

「あ、そうそう。俺の名前は名倉亮^{なぐらじやう}29歳独身だ。教師歴は今年で6年。クビにされた回数は確か18回だ。まあこれから1年よろしく頼む。」

教師歴の3倍の数クビにされる人間なんてこいつ以外には存在しないだろうな。

第4話：普通じゃない自己紹介！？（後書き）

夏川翔

赤髪に蒼色の目というかなり怖い雰囲気

髪型は後ろに長くうなじの辺りで縛っている

本文で言ったとおり、土系の魔法が得意（というより土系以外ほとんど使えない）

名倉亮

黒髪に黒目 髪型はリーゼントっぽい、見た目はかなり不良。というより性格も不良。

火系魔法が兎に角得意。火系なら最上級魔法も使えるかなりの実力者。

第5話：家へ帰宅〜vs電話〜

「ふああああ〜・・・」

今日は入学式の日だったので早く学校が終わる。

そして、今から帰つてるところだ。

正直、今日まともな授業とかがあつたらやばかつただろう・・・

「家よ！私は帰ってきたあ！」

某アニメのソロソンの悪夢さんの名台詞を言ってみたりしてテンションの回復を図る。

さて、朝は忙しかったのでいろいろ説明できなかつたから今説明しよう。

まず、俺は1人暮らしだ。まあ家族がないわけではない。母と義妹が1人いるだけだがな。

父は俺が4歳のときに死んだ。母が言うには第8次魔法大戦争つていうのに出兵していて、戦死したらしい。

で、何故俺が1人暮らししているかという俺が15歳になつたときに母から「もう15歳ならある程度の魔法とか使えるだろう？だったら1人暮らしをしろ。だから家から出て行け。生活費とかは全部自分で稼げ。」とか言われたからだ。

実際、1人暮らしを始めた頃はつらかつたが、今は一応料理などもそこそこできるようになり、不便は無くなり、普通に生活できるくらいにはなつた。

「さあて、何しようかね。」

これが俺の1番嫌いな時間、暇というものだ。

「誰かから電話でもかかってこないかな。」

トウルルルル トウルルルル

わお！ナイスタイミング！

「もしもし？」

「あ、お婆ちゃん？俺だよ俺！」

・・・オレオレ詐欺ですか？

まずいろいろ突っ込みたいが、俺の性別は男だ。

まあおもしろいから相手の話にのってみよう！

「おお！もしかしてタケシかえ？」

「そ、そうだよ！お婆ちゃん！俺タケシだよ！」

タケシって誰だよ

「それで？どうかしたのかえ？」

「それがさ・・・俺、さつき事故に遭っちゃって骨ボツキボキに折れちまったんだよ。だけど治療費がなくてさ・・・お婆ちゃんお金を 口座に振り込んでいてくれない？」

骨がボツキボキに折れてこんなに陽気に話ができる君は勝ち組。

「そうかい・・・爺さんの残した借金、ヒロシが夜逃げしたせいでできた借金、ナナミが男に逃げられてできた借金。やっと皆返済してゆっくり生活できると思ったのに・・・現実はそのあまかないとね・・・」

注：これはもちろん裕介の作り話です。

「……」

「分かったよ・・今通帳には私の全財産、1万くらいが残ってるはずさ。それを持っておゆき。私は一週間くらい何も食べなくても頑張るから。」

「待ってお婆ちゃん！やっぱ俺自分で頑張ってお金稼ぐよ！だからお婆ちゃん心配しないで！」

「そうかえ？でも困ったら私に相談するんじゃないぞ？」

「うん。ありがとうお婆ちゃん！じゃあね！」

「はいはい」

ガチャ

今俺はなにをやってたんだろう？

さて、飯でも食って寝るか。

トゥルルルル　トゥルルルル

またですか！

「もしもし？」

「お、裕介か？ワイやワイ。」

「我が家ではワイワイ詐欺に対しては留守番電話となります。ピーッという音の後に」

「すまへん！ワイが悪かったからきらんといて！」

最初からそうすればいいものを。

ちなみに電話相手は翔だ。

「で、なんか用か？」

「いや、暇やったから。」

ガチャッ

なんかうざかったから切っておいた。

さて、飯食つか。

第5話：家へ帰宅〜VS電話〜（後書き）

なんだか意味が分からなくなっちゃった^^；
その辺は暖かく見守ってください；

第6話：

決め！？

ジリリリリー ジリ・ガチャ

「ふあああ〜・・・」

はい、どうも。裕介です。

昨日はあの後飯食ってすぐメタン・・・じゃなくて寝たんですよ。

「さて、学校いくか。」

飯とか着替えとかはすっ飛ばして学校に行きますか。
そしてふと時計を見た。

- 08時00分 -

・・・？

・・・

「ぬあああああんだああああああとおおおお！?!
?!?!?!?!?!」

なんと、今日は8時10分から始まるのにもうこんな時かYO!

・・・昨日もこんなだったな。

「馬鹿言ってる暇はねえ！走るぜ！」

・・・っど

「あれがあつたな。逝くぜ！瞬間移動！！」
テレポート

そして・・・その後裕介の行方を知るものは誰もいなかった。

「じゃねえだろ！俺ただたんにテレポート使っただけだし！俺死んでねえYO！」

ふむ。我ながらナイス突っ込み。

ちなみに瞬間移動テレポート先は学校の教室前だ。

「馬鹿やってないで教室入るか。」

そして教室へ入った瞬間、

「おい！昨日の魔法凄かつたな！」

「私にもあーゆう魔法教えてくれないかな！？」

「サインくれえー」

「いつから魔法やってるの？」

「俺を弟子にしてくれ！」

・・・など、大量の生徒が俺に寄ってきて話しかけてきた。

「ああ！もう！うっせえ！帰れ！そして地獄におちるがいいさー！」

「「「「」」」」」

・・・

・・・

うん。しらけたっばい。

ガラガラッ

「おい！てめえら席に着きやがれ！」

おお！先生ナイスタイミング！

「亮せんせー！今僕たち裕介君に暴言吐かれたんで制裁加えてあげてくださいー」

「おい！棒読みでそんな怖いこと言わないでくれ！？」

「暴言？それが何が悪い。この世界の9割は暴言で構成されている。だから皆暴言は神様と崇める。いや、1番崇めるのは俺だがな。俺の次に暴言を崇める。そういうわけで席に着け。」

なんか先生言っちゃ駄目なこと言っただけですかね？

「さて！めんどくせえからHRは無しにする！」

おiiiiiiiiii!?

それが教師でいいの!??

「いいんだよ。ここでは俺がルールだ。」

「心読むなよ。」

「まあそういうことで授業を始める。」

HR無しにして授業かよ。。だるいな。

「さて！魔法が使える奴は表・・・じゃなくて廊下に出ろ！魔法が
使えねえやつは自習だ！」

表とかあんた何者ですか。つか魔法使えない奴自習ってどうなの？
まあ、魔法が使える奴は俺を入れて20人つてとこかな？
ちなみにクラス全体の人数は60人くらいだ。

「今から魔法が使える奴らでパートナーを決めてもらおう！」

パートナーか・・・。やっぱ翔に頼むかな。

「なお！普通に決めてもつまんねえからクジで決めてもらおう！」

第7話：パートナー決め！

くじ引きだって・・・？

「先生！くじ引きって四角い紙に数字や記号を書いてそれを箱に入れ、皆でガサゴソガサゴソして『これだーっ！』って叫んで1枚だけ取るっていうドキドキワクワクのあのゲームですか!？」

たかがくじ引きにこんな細かい説明はいらん。

「そう。そのくじ引きだ。ちなみに！組み合わせは男女がペアになるように仕組んであるからな！てめえら青春だ!！」

「くくくうおー！ー！」「くくく」

「ちなみに番号が書いてある紙は1〜10番だ！男女で同じ番号同士の方がペアとなる！わかったかあ!！」

「くくくうおー！ー！」「くくく」

・・・もう帰りたい。

「次！魔乃！」

「は〜い〜。」

ああ・・・俺の番きたよ・・・逃げ出したい。
きつと彼の有名なメロスが帰り道の道中で感じたのは俺と同じ気持ちだろう。

「え〜っと・・・これだっ！」

そして取った紙に書いてあった番号は・・・

「9番か・・・。」

9番とか超微妙じゃね？普通主人公は1番とかだろ？

「はあ・・・。なんかついてないな・・・。」

せめてパートナーは良い人であってほしい。

「ユウ〜何番だったあ〜？」

そう言いながら俺の所へきたこの女子は俺の幼馴染の大西綾だ。おおにしあや
見た目は可愛いんだが・・・性格に少々・・・いや、かなり問題がある。

前なんか少しからかったただけでボコボコにされた。

神様、こいつとだけはパートナーにしないでください。

「俺は9番だった。」

「え！？本当？私も9番だったんだ」

・・・神は俺を見放した。

「今物凄く失礼なこと考えてなかった？」

「いや、なにも。」

こいつも読心術が使えるのか？

「独身術？」

「そんな怖い術誰もつかわねえよ。」

「まあなんでもいいけどこれからよろしくね。」

「ああ・・・よろしく。」

「裕介ー！パートナー誰だったああああ！？」

そんなことを叫びながら来たのは俺の幼馴染その2、ひのやま 彰平山彰だ。

「俺のパートナーは綾だよ・・・。」

「え・・・。」

（裕介・・・きっとこれも運命さだめさ。諦めな。）

（運命って書いて『さだめ』とか読むな。気持ち悪い。あとそんなこと言ってるって殺るぞ？）

（ご、ごめんなさい。）

という感じのアイコンタクトを交わし、

「で、彰のパートナーは誰なんだ？」

「フフフ・・・見て驚け！このお方が俺のパートナー！西田未来にしだみくちゃんだあ！」

そう言っ出てきた子は正直かなり可愛いと思った。

身長は150cmくらいだろうか？黒髪のアストレートで、目はクリクリとしている。

一言で言うなら・・・そう。こっちから守ってあげたくなるような感じだ。

「えと、西田未来です。よろしく願います。」

と言っってお辞儀をする姿はかなりグツジョブだぜ！

・・・となんかキャラが変わっていたな。元のキャラに戻ろう。

「俺は魔乃裕介。よろしくな。」

「私は大西綾だよ。これからよろしくねっ！」

と、一通りの自己紹介が終わったところで亮先生（こう呼べとさっき脅された）が

「てめえら！もうパートナーは決まったな！？だったらさっさと教室に入りやがれ！」

と言い出したので、とりあえず俺達は教室へと戻っていった。

第8話：魔法について

パートナー決めが終わったあと、俺達は教室へ戻り、席についた。

「さて！授業を始める！・・・と言いたいところだが、今日はまだ授業はないので俺の武勇伝でも聞かせてやろう！お前からありがたく思え！」

うわぁ・・・本当どうでもいい。

「あれは俺が中学1年生の頃だった・・・。」

なんかあの人喋ってるけどとりあえず無視ってことで。

暇だから魔法についていろいろ説明したいと思う。
まず、魔法にはいろいろな属性がある。

火、水、土、風、雷、氷、光、闇

これが基本の八大属性と呼ばれるものだ。

でも属性はこれだけじゃない。これ以外にも特殊属性と呼ばれる属性がある。

そういう属性は生まれつきの才能とかセンスで使えるかが決まるらしい。（母談）

一つ例を挙げるなら瞬間移動^{テレポート}。

あれは『時空』と呼ばれる属性で、この時空属性はこの世の時空を捻じ曲げることができる属性だ。

って言っても俺は時空属性の魔法は瞬間移動^{テレポート}しか使えないんだけどね。

次に、魔法には属性とは別に種類がある。

初級魔法、下級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法

まあ言わなくても分かるだろうが、左から右へいくほど魔法のレベルは高い。

この 級魔法というのを魔法階級と言う。

俺は昔から魔法をやっているから（元々才能もあつたんだが）基本属性ならほとんど上級魔法くらいまで使える。

一応、最上級魔法も使えるんだが・・・とてつもなく魔力消費が激しくて1度使うと2、3日は魔法が使えなくなる。

というより最上級魔法なんていうものは一般的に『禁呪』きんじゆと呼ばれるほどに強力な魔法で、使える人間なんてそうはいない。

まあ簡単に説明をするとこんなもんかな？

（おい。さつきから何をブツブツ言ってるんや？亮先生さつきから裕介のほうをずっと見てなはるし。普通に怖いで？）

（いや、別に何も気にしないでくれ。）

いかん・・・実際に声に出していたらしい。気をつけねば。

「・・・で！俺は魔法暴走族『エレメントクラッシュ』を1人で壊滅させたんだ！すげえだろ！？俺を崇めろ！」

そんな凄そうな暴走族を1人で壊滅させるとかお前は何者だ？

「俺か？神だ。」

「頼む。人の心を読むな。」

「いや、今お前口に出たから。」

「マジですか？」

「冗談だ（爆）」

・・・殺^やつていいですか。

「まあお前なんかには俺を殺ることなんかできないが、めんどくさいからやめとけ。」

「あんたが悪いんですがね。」

そういやこの次の時間はもう昼食だな。

・・・さっきHRの時間だったはずだが一体どうしてこんなに時間が早く進んでるんだ？

『ページの都合じゃ。』

「だから作者出てくんな。そしてページというのはなんだ？」

『こつちの話じゃ。ふおっふおっふおっ。』

・・・こいつつぜえ。

『作者怒らせると裕介の存在も消してしまおうか？』

「一体なんの話か全く分かりませんがとてつもない寒気がしたので謝ります。ごめんなさい。」

『分かればいいのじゃ。ふおふお。それではさらばじゃ。』

いきなり俺の頭の中から喋ってくる奴。一体何者なんだ。

「裕介はん。一体さつきから1人で喋ってるんや？なんかの病気が？精神科とか紹介したるか？」

「それ以上喋るな。貴様をボコボコにしてしまうかもしれん。」

「冗談でもそういうこと言つと怖いで？」

「冗談ではないが？」（尋常でない殺気を込めて）

「す・・・すいまへん。」

「分かればいい。」

「さて！なんか魔乃と翔が喋っているがそろそろチャイムが鳴る！

次は飯だ！戦争だ！てめえら他のクラスに負けんなよ！」

「「「「うおー！」「」「」」」

教師の発言として昼食＝戦争っていう考えはどうなんだろう。

「ふん。魔乃。お前もこの学校の学食を見れば俺の言ってる意味が分かるさ。」

・・・行きたくねー！。

第9話：学校で遭難！？そーなんです！（前書き）

昨日更新できませんでした^^；

見てくれている人スイマセン；；

次からはこういうことがないように頑張ります！

それと、ついに1万アクセスを突破しましたwこれからもよろしく
お願いしますw

第9話：学校で遭難！？そーなんです！

キンコーンカーンコーン・・・

「さあチャイムが鳴った！てめえら戦争だ！Warだ！」

「「「「うおー！ー！ー！ー！」」」」

こいつらのテンションにはついていけないな。

「まーまー、祐介。現実逃避しないで学食行こうぜ？」

「げ・・・現実逃避なんてしてないもん！」

「喋り方キモイぞ？」

「ふん。・・・まあ逝くか。」

「字違うがな。」

こんな感じで彰と一緒に学食行くことになったんだが・・・

「遭難したんですか！？そーなんです！」

「駄洒落とか寒いぞ？それと現実逃避してるのはお前だな。つか彰

が道知ってると思つて着いていったのに知らないならそういえよ。」
「へっ！祐介も知らないくせに！」
「いや、迷つた本人にそんなこと言われても全く悔しくないから。」

まあ、そういうわけで迷つてしまった。

いや、だつてさ？この学校めちやくちや広いんだよ？
1つの学年だけで8クラス、各クラスに約60人いて、それ以外にも大量の教室があるんだよ？
1年生が迷うのも仕方ないじゃないか！

「なあ？何ぶつぶつ言ってるんだ？」

「い、いや。なんでもない。」

「……？変なの。」

この口に出る癖は早く直さないとな。

「んで？どーすんだよ？」

「ん、まああそこにいる女の人にも聞いてみよーぜ？」

「人はそれをナンパという。」

「祐介、俺をなんだと思ってる？」

「ナンパ男。」

「即答！？しかも断言！？」

「うつせえ。早く聞いて来い。」

「ひでえ！いいさ！聞いてくるもん！」

はぁ……めんどい。

「あの〜。」

「はい？なんでしょう？」

「この学校の学食ってどうやって行くんですか？」

「えーと。私もちょうど学食行くから一緒に来る？」

「え！？いいんですか！？行きます！おい祐介も早く来い！」

これを人は逆ナンと呼ぶ？

とりあえずいろいろ喋っているうちに（ほとんど彰1人でだが。）
この人は2年生だということが分かった。

「あ、そうだ。先輩名前はなんて言うんですか？」

「私の名前は美空唯みそらゆいだよ。あと私のことはタメ口でいいよ。」

「はい。分かりました。あ、俺の名前は平山彰です。こいつは魔乃祐介。」

「へえ〜。祐介君。私のことは唯って呼んでね。」

「はあ・・・唯先輩。」

「・・・唯って呼んでね？」

「ゆ・・唯、さん」

「唯って呼べ？」

「ひゃ、ひゃい・・・唯。」

「キヤー。唯だなんて照れるー！」

今もの凄い殺意を感じてめっちゃ怖かった・・・

「じゃ、じゃあ俺も唯って呼んでいいですかっ!？」

「唯って呼んだら殺っちゃうからね？」

「はい・・・。」

俺と彰の扱いの差がでかいな・・・。

「さ！着いたよ！」

そうして見た場所は・・・。戦場だった。

第9話：学校で遭難！？そーなんです！（後書き）

美空唯

2年生。身長：175cm 体重『ピー』kg

作者「ん？なんか今ピーって音がしたような？」

唯「作者それ以上喋ると逝くよ？」

作者「ごめんなさい。」

まあ、それと水属性の魔法が得意。

第10話：戦場にて・・・

正直これは戦場としか言えないと思う。

何故なら、そこらじゅうから魔法がとびかってるんだ。

「燃える炎！『ファイア！』」

「落ちる雷！『サンダー！』」

まあほとんどが初級や下級の魔法だから大したことはないな。

「どう？驚いた？これがこの学校の名物『戦場の学食』だよ」

「唯・・・余裕だな。」

「美空さんこれ大丈夫なんですか？」

「私はここに1年生のときからきてるからね　ここの部屋は魔法絶
対防^{クシールド}御壁とかいう科学で作ったものに覆われてて魔法じゃ傷つかな
いんだよ。」

「へえ〜。」

これは感嘆するしかないな。

「じゃ。早く行かないと時間無くなっちゃうから私もういくね！」

「え？ちよ・・・」

「また今度会おうね〜」

そう言って唯は1人で戦場の中へ行ってしまった。

「「「「「「「「」」」」」」」」

「彰。どうするっ..」

「どうするって言っても腹減ったぞ。」
「だよな……」

さて、どうしたものか。

「飛んでる魔法はほとんどが初級とか下級だよな？」

「見たところそうだな。」

ふむ。ならこれで行けるか。

「魔力集中。魔法防壁^{レジスト}！」

この魔法は特殊属性の一つ、『防御』という属性だ。

つつてもこれは特殊属性でもほとんどの魔法使いが使えるから特殊
と言っていいのか分からんがな。

「あー！祐介せいぞろい！俺が防御属性使えないの知ってるだろ！？」

知らんがな。

「ふん。戦場じゃ力が全て。俺は行かせてもらう。」

「うわーん！俺もう帰るー！」

ふむ・・・

「余裕だな。」

レジストをかけてるおかげでほとんどの魔法を防ぐことができる。
この分だとすぐ飯が買えそうだ。

「おばちゃん！なんか安いのちよーだーい！」

「ふっふっふ・・・？欲しいのかい？」

「いや、欲しいからきてるんだが。」

やばい。このおばちゃん、魔力量が半端ないぞ？

「ふふふ。じゃあこれを持っておゆき。私のおごりだよ。」

「え？いいんですか？」

「だってアンタ、『エレメンタル』の息子だろ？」

「っ！」

「さあ、早く教室へ戻りなさい。」

「・・・はい。」

なんなんだ。あのおばちゃん。

俺の親のことを知ってやがる・・・

ちなみに、俺の両親は八大属性の魔法を最上級まで使えて、特殊属性もかなりの数を扱えたということで昔は他の人から『エレメンタル』と呼ばれていた、って母が言っていた
でもそれはかなり昔、それも最高クラスの魔法使いの中でしか知られていなかったはず。

「いったい、あの人は何者なんだろうな。」

ま、学校で働いてるってことは害はないだろう。

「彰とか待ってるだろうし早く教室へ戻るか。」

そうして、俺は戦場を後にした。

第11話：おばちゃんの正体？ そしてその後（前書き）

なんだか日曜日は忙しくて更新できない・・・
やっぱり基本は不定期更新で行きたいと思います。

第11話：おばちゃんの正体？ そしてその後

「はぁ・・・」

あ、どうも。祐介です。

結局あの後なんにも無くて、今帰宅途中です。

え？なんでため息なんかついてるんだって？

だってさあ？あのおばちゃん、俺の親の事しってるんだぜ？
それがなんだかスッキリしないんだよね・・・。

「ただいまあ〜。」

つっても家には誰もいないから返事なんてないんだけどね。

「お帰りなさい」

「ああ。うん。ただいま。」

「ご飯にします？それともお風呂にします？」

「飯頼む。」

「はいはい」

「なあ。」

「はい？」

「そろそろ突っ込んでいいか？」

「何をですか？」

「綾。何故お前が俺の家にいる。俺の家は鍵が閉まっていたはずだ。

そして家が若干綺麗になっっているのも謎だ。」

「そんな一気に聞かなくても・・・。」

「兎に角1つずつ説明してくれ。」

「えーっと。まず私が何故ここにいるかというところ、ユウのお母さんに伝言をされたからだよ。」

「伝言？」

「うん。なんか私たちの通ってる学校に知り合いがいるから見かけたらよろしく頼む。って言ってたよ。」

まさか・・・

「その知り合いって学食のおばちゃんか？」

「え！？知ってたの？つまんなーい」

「つまんないとかはどうでもいいが、そいつの母さんとの関係とか聞かされたか？」

「もちろん なんか昔のお仲間さんだって言ってたよ」

ああ・・・そーいや前言ってたな。昔は母さんと父さんとあと2人でチーム組んでたって。

「・・・母さんの仲間なら別に安全か。」

「？ユウなんか言った？」

「いや、なんでもない。だからさっさと帰れ。」

「え〜？今日はここに止まる〜！」

「帰れ。」

「うっ・・・そんなこと言ってるの？」

「なにがだ？」

「昔の『ピーツ』とか『プーツ』とか『ズキューン』とかばらすよ？」

「すいませんごめんなさいどうぞ今日はお泊りになってくださいませ綾様。」

「分かればよろしい」

まあ見たとおり、俺は綾にかなり多くの弱みを握られててな……。俺の天敵ってやつかね。

「さて。明日は休みだから遅くまで起きててもいいが飯にするか？」

「そだね。たまにはユウの手料理食べたいし」

「じゃ、しばらく待ってる。」

「はあ〜い」

ま、こつこつのも悪くないかな。

「で？」

「？」

「何故俺と一緒に布団で寝ようとしてる？」

そうなんです。寝ようとしたらこいつ、俺と一緒に布団に入ろうとしてくるんです。

「そんなの決まってるじゃんかあ。ユウの傍にいたいから」

「俺は一緒にいたくない。」

「え〜!? こんな美人と一緒に寝たいって言ってるのに〜?」

「美人つてのは否定しないがこれ以上ここにいと流石に怒るぞ?」

「え? 私が美人? ユウに美人って言われた・・・。」

なんだ? こいつ顔が真っ赤になったぞ?

「どうした? 風邪か?」

「・・・鈍感。」

「へ?」

「いいもん! 元々そういうつもりなくて言ったのはわかってるんだから!」

そういつて綾は隣の部屋へ行ってしまった。

「わけわかんねえ・・・。」

まあこういつときは寝るに限る。

どうせ綾も明日になれば元に戻るだろう。

「おやすみ。綾。」

そう、誰にも聞こえないように呟いてみた。

「トウおやすみー！ー！」

聞かしてあるのかよ。

第12話：この人を憶えてる人いるかな？（前書き）

更新遅れてすいません；；；

明日から修学旅行でその準備とか忙しくて・・・。

あ、あとアクセス数が2万を超えました！皆さんあろがとつござい
ます！

・・・え？もう2万2千？

と、とにかくこれからも「俺の魔法使いな日々」をよろしくお願
い
します！

第12話：この人を憶えてる人いるかな？

こんにちは。西田未来です。

え？誰お前？

私の事を知らない人は第7話を見れば分かると思います。

さて、今私は魔乃君の家の前にいるんですが、何故こんなことになったのか回想してみましょー。

『未来ちゃん。今日暇？』

今日のお昼頃、私のパートナーの彰君からいきなりこう電話がかかってたんです。

「はい。まあ暇ですけど・・・？」

『よかった。今から祐介の家に遊びに行くんだけど一緒にいかない？』

「行ってもいいんですけど、私なんかと一緒に行ってもいいんですか？」

「いいよいいよ。人数多いほうが楽しいしね！」

「分かりました。」

「じゃ、今からそっちに向かいに行くね。」

っていうことで彰君が向かいに来て今の状況に戻ります。

「うわぁ・・・大きい・・・。」

「祐介の家はかなり金持ちだからな。息子の1人暮らしにも随分金掛けたんだろ。」

「魔乃君の両親ってなんの仕事をしてるんですか？」

「・・・悪い。俺には言えない。」

そう行つた彰君の顔はなんだかつらそうだったから、私も深くは追
求せず、

「そう。」

とだけ言っておいた。

「じゃ！祐介の家に突入！」

「ってなんで彰君が魔乃君の家の鍵を持ってるんですか？」

「ふっ。俺が祐介の幼馴染だからさ！」

理由になってない気がする。

「まあそんなことは置いといて突入！」

「あ、待ってくださいい。」

そして家に入った私たちが見たのは

抱き合ってる魔乃君と綾ちゃんでした。

第13話：1話のときよりも凄い朝の地獄

いよっ！祐介ですっ！

いやー。なんか知らないけど彰の馬鹿と西田さんが俺の家の玄関から入ってきてるんだよねー。

ん？今の俺の状況？

あはは……。なーんか綾と抱き合ってるんだよねっ！

……。すいません現実逃避しました（泣

ははっ！なんだか意識がとても朦朧してるよ！

まあ、とりあえず今日、何故こんなことになっているかというと・

・

「ユウ！起きろお！」

「がぶらぐぶえ！？」

前日、綾と一つ屋根の下で寝てた俺は、午前7：00ちょうどにその安眠を綾によって破壊された。

「あの、綾さん？いくら俺でもいきなり金槌で顔面殴られたら死ぬよ？っていうか普通死ぬよ？」

「大丈夫！8割の力でしか殴ってないから」

そう。ここまでくれば分かるだろう。綾は料理が天才的に下手なのだ。
いや、天才的に下手って日本語がおかしいけど、とにかくそれくらい下手なのだ。
どんくらい下手かっていうと、カップラーメンを奴に作らせてその中を覗くと麺ではなく梅干がギッシリ詰まっている っていうくらい凄く下手なのだ。

「くそ・・・逝くしかないのか。」

そう、俺は決め、とにかく1階へ向かうことにした。

.....

凄い光景だ。これを見たらきつと閻魔大王もびっくりして逃げ出すだろう。

まず1つ目。

何故味噌汁が青いんだ。味噌を入れたら何をしてこんな色にはならない。これぞ、人間の夢見るおーしゃんびゅー。

2つ目。

ご飯が黒い。コゲているとかそんな次元じゃなくてドス黒いんだ。

もう元がご飯であった原型すら留めていない。

3つ目。

わけの分からない生命体が蠢いている。これは一応焼き魚の扱いなのか？魚に10本も足は無いぞ。

4つ目。これが最後だが1番意味が分からない。

なんでお茶が黄色い。我が家に黄色い飲み物など存在しない。という中で動いているムカデのような物体はなんなんだ。しかも羽が生えている。新種なのか？

「・・・んで？これはなんだ？」

「見て分からないの？朝ごはんだよっ！」

これを見て食べ物だと認知できるのはお前だけだよ。

「ああ。あともう一つ言っていていいか？」

「ん？なに？」

「7時に起きたはずなのに何故もう12時なんだバカヤロウ。」

「あははー。それはきつと作者が都合あわせるために時間進めたんだよ」

『ちよっ。綾さんそんな事情ばらさないでくださいよ（汗）』

「黙れ 作者なんかさっさと消えてねっ！」

『酷い！消えればいいんでしょ！』

シユウウウウー

「ね？」

「ね？じゃねえよコンチクショウ。」

ってというか作者最初は『くじゃ。』って言う口調じゃなかったのか？

「まあどうでもいいから朝ご飯兼昼ご飯食べよう！」

来た・・・とうとうこの時間が来た。

ああ。綾よ。そんなキラキラした目で見ないでくれ。俺にはできない。

うわ、俺が食べずにいると綾の目がウルウルしてきた。やばい罪悪感が・・・

「あ、ははは・・・いただきます。」

「うん！どうぞ召し上がれ！」

心に決める俺！逝くぜ！（誤字じゃありません）

パク

・・・

あれれ？なんだか俺倒れてないかな？

あー倒れてるな。

っと。俺綾に受け止められたらしい。

そうして

俺の目に最後に映ったのは玄関で驚愕に目を見開いている西田さんとなんだか苦笑している彰の馬鹿野郎だった。

第13話：1話のときよりも凄い朝の地獄（後書き）

らいふ「いやー。更新遅れたね。」

祐介「1ヶ月も放置とか馬鹿だろ作者」

らいふ「いやさ？結構テストとかいろいろあつたんだよ？」

祐介「実際は？」

らいふ「・・・っ！ああ！ネットゲばつかやってたから更新できなかったんだよ！読者の皆さんすいません！」

祐介「最初からそう言えよ。」

らいふ「でも一応小説書く気はあるので！これか・・・」

祐介「ちよつと待て。」

らいふ「なんだよう？」

祐介「作者名が『らいふ』とかキモイだろ。せめて『雷風』と名乗ったらどうだ。」

雷風「それいただき。これからこの場では雷風と名乗らせてもらいます。」

祐介「少しはマシになったか。」

雷風「んで、さっきの続き。これからできるだけ一週間〜10日くらいの方に1話くらいを目安に更新していきたいと思えます。」

祐介「これからも糞作者の駄文をよろしく。」

雷風「駄文って言うなああああああああ！」

第14話：扉の向こうは・・・？（前書き）

なんだか魔法の説明の仕方が難しいので、これからは新登場した魔法には、その下の行でその魔法についての説明を入れるようなスタイルをとっていききたいと思います。

第14話：扉の向こうは・・・？

「サテ？セツメイシテモラオウカ。アキラクン？」

はい。祐介です。

先ほどの悲劇から復活した俺はいきなり俺の家に侵入してきた彰を現在俺の部屋でイボイボマツトの上に正座させて質問をしています。

え？尋問じゃないか、だって？やだなあ人聞きの悪い

ああ、ちなみに西田さんは彰に連れてこられただけって分かりきってるから隣の部屋で綾と一緒にお茶でも飲んでると思われれます。

「あの「早く答えろや」・・・はい。」

まあ返答によつてはボコボコにするけどね！。

「ただ単に暇だったからきます」「燃える炎！ファイアボール！」イギヤアアアア！」

- ファイアボール -

炎系下級魔法

小さな火球を複数作り出し、敵にぶつける。よくRPGとかである弱い魔法。

イギヤアアアアとかいう悲鳴初めて聞いたね。やっぱり彰はリアクションがおもしろい。

「あ……あの……」

「ナンダイ？アキラクン？」

「いえ……なんでもありません……（泣）」

これできつと少しは懲りたよね！

「まあ暇だし。折角西田さんとか来てくれたんだからなんかして遊ぼうか」

「俺入って無くない？」

あの後、隣の部屋にいた綾達を俺の部屋へ呼んでいろいろ雑談をしている。

そしたら、入ってくるなり西田さんが彰に対して回復魔法を使っ
てねー。少々驚いた。

いや、だってね？回復魔法ってのは光属性の魔法の中でも結構レベルの高い魔法で、少なくとも高校生程度で使える魔法じゃないんだよ。

きつと西田さんも俺みたいなの教育されてたのかなー。

あ、やべ。なんか急に親近感が……。

「んでー？何する？」

「そだな。『彰をフルボッコにして遊ぼうゲーム』は？」

彰をフルボッコにして遊ぶゲームとは！

その名の通り彰1人を複数人でボッコボッコにして遊ぶゲームである！

「いや、今の説明完全に必要ないし。ていうか俺が却下だし。」

「チツ！」

「今舌打ちしたよね！？絶対したよね！？」

「イイエ？シテマセンヨ？」

「棒読みだし！」

でも……本当暇だな。

ピンポン

「あ、チャイムだ。ちよっくら見てくる。」

そう言って、俺は玄関へと向かった。

そして扉を空けたら

その先は異世界だった。

なんてことがあるはずもなく、誰もいない、ただのピンポンダッシ
ユだった。

74

そんなこんなで俺の休日は終わった。

・・・俺結局災難遭っただけだったな。

第14話：扉の向こうは・・・？（後書き）

祐介「雷風よ」

雷風「はいはい」

祐介「いくらなんでも適当じゃないか？」

雷風「な、なんで！」

祐介「いや、だって 遊ぼう っって言ってたのにそのへん描写ないし。実際その辺書くのが難しかったから飛ばしたんだろ？」

雷風「グウ！」

祐介「大体最後の終わり方ありえないだろう。」

雷風「どうせ俺はネタの思いつかない駄目作者だよー！」

祐介「あつ！逃げんな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394e/>

俺の魔法使いな日々

2010年10月12日04時22分発行